

## 第213回（令和6年2月18日施行）

### 1 級原価計算・工業簿記

第1問 「原価計算基準」の内容に準拠した語句選択問題を出題しました。「原価計算基準」における各種用語の正確な意味や実務上の取り扱いに加え、例外事項に関する記述などについても意識して学習してみてください。

1. 原価計算の一般的基準に関する問題です。基本的には製品、仕掛品、半製品が原価計算対象となります。本問は「原価計算基準」六(一)からの出題となります。
2. 原価部門の設定に関する問題です。直接製造作業の行われる部門を製造部門、製造部門に対して補助的關係にある部門を補助部門といいます。本問は「原価計算基準」一六からの出題となります。
3. 原価の費目別計算に関する問題です。原価要素は原則として形態別分類を基礎とし、これを直接費と間接費に大別し、必要に応じて機能別分類を加味することとなります。本問は「原価計算基準」十からの出題となります。
4. 連製品の計算に関する問題です。同一行程において同一材料から生産される異種の製品で、相互に主副が明確に区別できないものは連製品となります。本問は「原価計算基準」二九からの出題となります。
5. 仕損費の計算および処理の問題です。仕損が補修によって回復できる場合は補修指図書に集計された製造原価を仕損費とし、本問のように補修によって回復できない場合は代品指図書を発行し原価を集計します。本問は「原価計算基準」三五からの出題となります。
6. 標準原価計算の目的に関する問題です。標準原価計算の目的には原価管理のほかに、標準原価を勘定組織の中に組み入れることによって記帳を簡略化し迅速化するという目的があります。本問は「原価計算基準」四十(四)からの出題となります。

第2問 製造業における仕訳の問題です。すべて過去問題を参考に出題しています。

1. 先入先出法による材料の消費額の問題です。消費した2,200kgのうち、520kgは@¥660、残りの1,680kgは@¥680として計算します。
2. 工場消耗品の消費に関する問題です。月初棚卸高¥113,000+当月購入高¥1,233,000-一月末棚卸高¥146,000=¥1,200,000が消費額となり、製造間接費勘定に振替えられます。
3. 賃金の支払いに関する問題です。総支給額の¥3,143,000から社会保険料および所得税等の¥403,000を差し引いた¥2,740,000が当座預金から支払われることとなります。
4. 副産物の処理に関する問題です。第2工程の終点時点で集計されていた¥3,288,000から副産物の評価額¥93,000を控除した¥3,195,000が主産物の完成品総合原価として

製品勘定に振替えられます。

5. 本問は仕損が補修によって回復不能（全部仕損）のため、代品製造のための製造指図書を発行した場合の問題です。旧製造指図書である #101 の見積売却価額 ¥43,000 を集計された製造原価 ¥562,000 から控除した ¥519,000 を仕損費として処理します。
6. 工場会計が本社より独立している場合の工場側の返品の仕事です。倉庫および製品勘定は工場に設けられているため、返品が発生した際、製品は工場に戻ってきます。対して販売は本社が行っているため、貸方は本社勘定になります。

第3問 連産品原価計算表の問題です。製品は X, Y, Z の三種類がありますが、連産品なので、最初にまとめて連結原価を計算した後、各製品ごとにあん分することとなります。

まず、等価係数は正常市価を基準で決められているため、X 製品の @¥400 を 1 とすると、@¥1,600 の Y 製品は 4、@¥1,200 の Z 製品は 3 となります。これらに各製品の生産量 (X 製品 3,500kg, Y 製品 1,200kg, Z 製品 2,200kg) を掛けると、X 製品 3,500, Y 製品 4,800, Z 製品 6,600, 合計 14,900 という積数が計算できます。

連結原価は、月初仕掛品 ¥518,000 + 材料費 ¥1,635,000 + 賃金給料 ¥1,429,000 + 経費 ¥662,000 - 月末仕掛品 ¥668,000 円 = 3,576,000 円と計算することができます。これを積数に応じて各製品にあん分します。

- X 製品 :  $¥3,576,000 \times \frac{3,500}{14,900} = ¥840,000$
- Y 製品 :  $¥3,576,000 \times \frac{4,800}{14,900} = ¥1,152,000$
- Z 製品 :  $¥3,576,000 \times \frac{6,600}{14,900} = ¥1,584,000$

このあん分原価を各製品の生産量で割ると単位原価が計算できます。

- X 製品 :  $¥840,000 \div 3,500\text{kg} = @¥240$
- Y 製品 :  $¥1,152,000 \div 1,200\text{kg} = @¥960$
- Z 製品 :  $¥1,584,000 \div 2,200\text{kg} = @¥720$

X 製品勘定については、借方に前月繰越 ¥128,000 円と上で計算した仕掛品勘定からの振替え ¥840,000 が記入され、合計 ¥968,000 となります。売上原価の計算は平均法であるため、この合計額のうち当月販売数量 3,600 kg 分の ¥871,200 が売上原価に、月末棚卸数量 400kg 分の ¥96,800 が次月繰越となります。

第4問 本問は、2つの工程を経て汎用的な製品を大量生産している企業が工程別総合原価計算を採用している場合の問題です。第1工程の完成品がすべて第2工程に振り替えられるわけではなく、一部は半製品として倉庫に保管されることに注意が必要です。また、各工程の月末仕掛品の評価は、第1工程が平均法、第2工程が先入先出法によって行われ

ているため、問題の設定にも注意しながら学習を進めてください。

過去にも類似の問題が出題されていますので、条件設定の違いも意識しながら学習を進めてみてください。